



何を話しましょうか？ 「矛盾」、「失敗」そして「Diversity」

アジレント・テクノロジー・インターナショナル株式会社半導体パラメトリックテスト事業部
製品開発部 シニアエンジニア 小室 貴紀

このたび、群馬大学 産学連携・先端研究推進本部の客員教授を仰せつかりました、小室貴紀と申します。

私は多くの協道にも首を突っ込んできましたが、概ね電子計測器、特にそのアナログ部分の開発をしてきました。電子計測器を「使う」技術者は多いのですが、それを「作る」側が何を考えているのかは、なかなか語られることはありません。何かの参考となることもあるかと思い、電子計測器の中で使われている技術や考え方について、客員教授としての講義の中でお話ししたいと思います。

電子計測器の技術には、大きな特徴があると感じています。

電子計測器自身も電子部品を用いた装置であるにもかかわらず、常に時代よりも先を行くことを求められているのです。エレクトロニクス産業における技術の進歩が速いことは誰も認めるどころですが、新技術が世に出るときには、その新技術を正しく評価するための計測技術は確立している必要があります。新技術による被測定物よりも電子計測器の方が高精度であることを、計測器を「使う」人々は当然と考えているのですから。

この話には、ある種の矛盾が含まれているようにさえ感じますが、電子計測器の技術者は、この難問から目を背けることなく挑戦し、エレクトロニクス産業の発展を支え続けてきました。「使える技術は何でも使う。それでも足りないので、とにかく知恵を絞る。」そんな苦闘の歴史の一端でもお伝えすることができれば、私の講義は目的を達したことになるでしょう。

計測器に限らず、開発の成功談には、技術的な正しさ、あるいは先見性といった教訓が含まれていることでしょう。しかしそんなものは、後から見て辻褃を合わせた屁理屈の場合が多いのです。少なくとも私は、目の前の難問を相手に苦しみ続けているだけであり、先見性などを意識して仕事をしたことはありません。私の経験を今振り返ると、輝かしい失敗の歴史であり、公開がはばかられる「恥」の羅列といえます。この失敗談は、決して教科書には載らない話ですが、学生諸君が望むのであれば、少しだけ公開することにしましょうか。「反面教師」という便利な言葉もあることですし。

私は現在外資系の企業に勤務しております。「外資系」であることを基準に就職先を決めたわけではなく、結果として、そこに仕事があったというだけなのですが、他の方々とは少し異なる経験もしているのかもしれませんが。上司も同僚も仕入先も顧客もWW（ワールドワイド）ですから。また、過去には日本の企業に勤務していたことも、国家プロジェクトに参加したこともあります。

そんな私にとって、異文化交流は日常の話題です。そして、世界が、日本が、技術者の視点からどう見えるのかについても、最近感じていることを学生に伝えたいと思っています。